

Ver 2026

# 景観まち歩きマップ

万葉集版  
Travel Guide

WEB 版まち歩きマップ

解説箇所をマップで  
確認できます



～ 小川町 ～

## 内容

内容.....	1
<b>小川町まち歩きマップ</b> .....	<b>2</b>
小川町の概要 .....	2
(町概要01) 町の概観—地形と川 .....	2
.....	2
(町概要02) 武蔵の小京都.....	2
万葉集.....	4
(万葉集 01) 仙覚律師遺蹟 .....	4
(万葉集 02) 万葉歌碑モニュメント .....	4

# 小川町まち歩きマップ

## 小川町の概要

### (町概要01) 町の概観—地形と川

小川町は埼玉県ほぼ中央に位置し、広い関東平野が外秩父の山なみと接する位置にあり、四季を織りなす山々に囲まれた小川盆地の市街地の中央を槻(つき)川が流れています。この紙漉きを育んだ母なる川「槻川」は、東秩父村白石峠を源流とし、小川町腰越落合で笠山を源流とする館川の流れが合流します。小川盆地へ入った槻川は、町場を流れ下小川で兜川を合流し、仙元山の裾を蛇行して下里へ入り嵐山町へと流れ下り、やがて荒川に合流します。



槻川本堰の清流

小川町の地形は非常に変化に富んでいます。

最も高い地点は、東京からも見える町のシンボル笠山であり、標高837mです。その美しく優しい山容から、人びとは親しみをこめて乳首山とも呼んでいます。山頂には笠山神社が鎮座し、江戸時代までは修験者の行場として女人禁制の聖地でした。一番の低地が八和田地区を流れる市野川の標高55mで、その差は782m。この標高差の中に、山地・小川盆地・丘陵地帯があります(小川町役場は標高約91m)。人びとはこの地形と川が育んできた自然を活かし、古くから和紙、絹、建具、酒造などの産業を起こし地場産業へと発展させて、町場の賑わいを築きあげてきました。



仙元山からは小川盆地を一望できる

### (町概要02) 武蔵の小京都

小川町は、山・川・地形など京都に似た自然景観や文化と歴史、伝統的産業を有していることから、武蔵の「小京都」と呼ばれています。昭和60(1985)年に設立された全国京都会議(※)に加盟しています。

#### ※ 全国京都会議の加盟条件

「1 文化と歴史的要件」、「2 地形・風土的要素」、「3 伝統的産業要件」の3条件があります。この要件を小川町に当てはめてみます。

## 1 文化と歴史的要件

国の重要文化財に指定されている緑泥石片岩(青石)を用いた石造法華経供養塔(六面幢・ろくめんとう)が大聖寺(芭蕉03)にあるほか、万葉集の研究者として名高い仙覚(万葉集01)が、文永6(1269)年、本格的な万葉集注釈として学問的価値の高い「万葉集註釈」全10巻をこの小川町で完成させるなど、古くからの歴史と文化のある町である。



和紙の七夕飾りが通りを埋める

また、1300年の歴史ある手漉き

和紙、特に「細川紙」の技術(建築05)は、国の重要無形文化財に指定されており、平成26(2014)年11月27日にユネスコ無形文化遺産に登録された。さらに、令和6(2024)年12月5日に、「伝統的酒造り」も同じく無形文化遺産に登録された。その日本酒を造る酒蔵が今でも3軒ある。(観光08~11)

## 2 地理・風土的要件

小川町は、周囲を緑豊かな外秩父の山々に囲まれた京都と同じ盆地で、市街地の中央に槻川が流れる自然景観があり、歴史を秘めて佇む史跡や往時の面影を留める街並みなどの風情、伝統ある祇園祭(寺社03)（「おぎおんさま」がなまって、「おぎよん」と年配者は呼んでいる。）がある。

さらに、敗戦後の混乱が続いていた昭和24年には、「和紙の町小川」の復興を願った七夕まつりが始まった。和紙の町ながらの豪華な竹飾りに加え、当時はめずらしかった花火大会を組み合わせた祭りは大いに賑わい、町最大の観光行事として現在も続いている。

## 3 伝統的産業要件

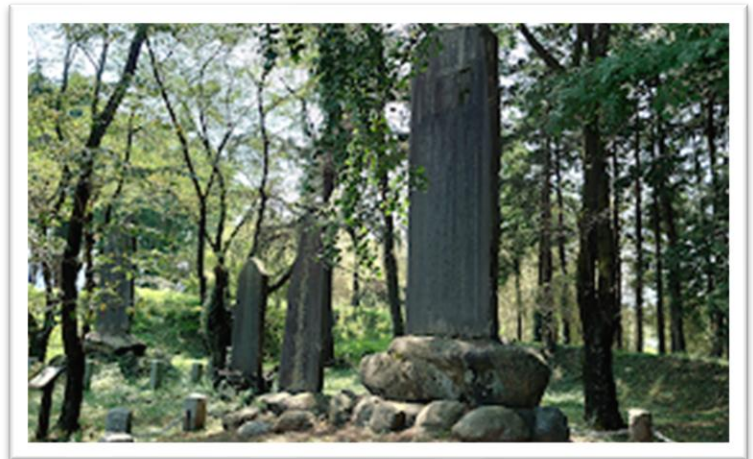
そのほか、同じく歴史を持つ「小川絹」(建築02・10)や、森林資源を活用した「建具」、地下資源を使用した「鬼瓦」などの伝統工芸品がある。また、京都に似た盆地独特の気候と良質な地下水を活かして「伝統的酒造り」が行われてきた。(観光08~11)

## 万葉集

### (万葉集 01) 仙覚律師遺蹟

仙覚律師(せんがくりっし)は、奈良時代の終わりには解読困難となっていた『万葉集』の歌4500首余りを読み解き、我が国で初めての『万葉集註釈』を完成させた鎌倉時代の学問僧侶です。私たちが万葉歌を読むことができるのは、仙覚律師による読みと解読が基本となっています。

この『万葉集註釈』は麻師宇郷(ましうごう)すなわち小川町で完成させました。



中城跡に顕彰碑は建てられている



従四位の官位が見える

仙覚律師顕彰碑は昭和3年、昭和天皇即位大典の時に仙覚律師保存会によって建立され、県の旧跡に指定されています。

顕彰碑は八幡台の中城(なかじょう)跡にあります。2基あり本碑が大きい方で、高さ4mもの大きな仙台石に彫られています。裏面には歌人佐々木信綱の歌がきざまれています。

小さい副碑には、「昭和三年十月十日天皇即位の大礼を挙げさせ給ふに当りて、畏(かしこ)くも仙覚に**従四位**(じゅしい)を贈らせ給へり。昭和四年四月六日謹みてこれを勅す」とあります。

### (万葉集 02) 万葉歌碑モニュメント

小川町は万葉集ゆかりの地です。小川町駅前通りから中城跡(城02)に向かう北裏通り沿いには、万葉歌碑が設けられています。それらを巡りながら進むと仙覚律師顕彰碑にたどり着くことができます。

日本最古の歌集である万葉集には、奈良時代を中心に約130年間に渡る短歌、長歌、旋頭歌(せどうか)など4500首以上が収められています。自然の豊かな情景に心を重ねて詠まれた歌が多く、約1500首に植物や花が詠みこまれています。モニュメントは、その中から68首の歌を選び解説を付け、その歌にふさわしい小川の情景や花の写真と案内を添えています。なお、本誌の解説と写真はモニュメントとは異なります。

(1) 熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮も  
かなひぬ 今は漕ぎ出でな

〔よみ〕にきたつに 船乗りせむ(ん)と 月待てば  
潮もかないぬ 今はこぎいでな

巻一 八 額田王(ぬかたのおおきみ)

〔大意〕 この熟田津で、船出をしようと月の位置  
を待っている。潮時(しおどき)が来た。いま漕ぎ  
出せ。

〔解説〕 朝鮮半島において、唐・新羅(しらぎ)に  
攻め滅ぼされた百済(くだら)を救援するため  
に、斉明(さいめい)女帝は筑紫(つくし=北九  
州)へ向かいます。随行していた額田王は、四国松山でこの歌を詠みました。

太古より航海するときには、月や星座、山などの方角から自らの位置と潮の流れの変化を読み解きます。この歌は、潮の流れが変わる時刻を月の方角から判断して、出港にちょうどよい時を詠ったものと考えられます。

あなたも満ちた月の出を待ち、月明かりに照らされて浮かぶ小川の山並みを眺めてみませんか。



(2) あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る



あかね色に染まった大空

〔よみ〕 あかねさす むらさきのゆき  
しめのゆき のもりは見ずや きみが  
袖振る

巻一 二十 額田王(ぬかたのおお  
きみ)

〔大意〕 夕焼けの紫草(草木染の原料)  
の野(朝廷の管理地)をあちらこちら  
歩かれると、野草園の番人が見咎(み  
とが)めますよ、あなたが袖を振られ  
ているのを。

〔解説〕 天智天皇、即位の年の五月、  
薬草摘みをしながらの逢瀬(デート)  
の歌です。

作者は大海人皇子の恋人で、女の子を生みましたが、後に兄の天智天皇に嫁したとされています。

枕詞(まくらことば)として使われている「あかね(茜)」は、小川の山野にも自生しているツル性の植物です。その名のとおり赤に近い色の根は、糸や布地を染めるために使われてきました。

(3) 紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめやも

〔よみ〕 むらさきの にほへ(おえ)るいもを 憎くあらば ひとつまゆえに あがこいめやも  
巻一 二一 大海人皇子(おおあまのみこ)

〔大意〕 紫の匂い立つような美しいあなたが憎くてしかたがない、人妻となってしまったのだから、私の恋ごころよ、静まってくれないものか。

〔解説〕 この歌は雑歌(ぞうか)に属しますが、前首との相聞歌(そうもんか)の形式がとられています。お互いにあらわな恋慕の情を紫という色に託し歌を交わしています。

紫草は、古代人が高貴な色とした紫色に染めるために使われました。絶滅の危機にある希少な植物、小川では万葉集の啓もう活動を行う NPO 法人が、紫草など歌集に詠まれている希少種の保存栽培をしています。展示会を開くこともあり、実物を間近に見られるかも。

(4) 春過ぎて 夏来るらし 白栲の 衣干したり 天の香具山

〔よみ〕 春過ぎて 夏きたるらし しろたへ(え)の ころも干したり あめのかぐやま  
巻一 二八 持統天皇(じとうてんのう)

〔大意〕 春は過ぎて、夏が来たようです。白たえの衣が干してありますね。香具山には。

〔解説〕 古代史に大きな足跡を残す女帝が詠んだ歌です。白栲(しろたえ)は白妙とも書きます。栲(たえ)は、クワ科の梶(カジ)の木の皮を叩きつぶし柔らかくした繊維から織った布です。ただ、香具山は全山が神域として、皇室が最も神聖視してあがめる対象であるため、清潔な白布とはいえ干すことなど考えられません。事実としたら、何とも不可思議な歌です。

その布は、ここ小川からも朝廷に年貢(調)として納められ、その記録が東大寺正倉院に蔵されています。カジの仲間の楮(コウゾ)も自生し、清流に恵まれたこの地は、枝の皮を原料にして漉く和紙の産地へと発展しました。濡れた状態の和紙を板に張り付け、陽に当てて乾かす眩い白さと晴天が続けば儲かることから、「ピッカリ千両」と呼ばれました。道の駅おがわまち(観光05)と小川和紙体験学習センター(建築05)では、紙漉き体験もできます。

(5) 東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ

〔よみ〕 ひむ(ん)がしの のにかぎろひの 立つ見えて かへ(え)り見すれば 月かたぶ(む)きぬ

巻一 四八 柿本人麻呂(かきのもとのひとまろ)

〔大意〕 東の野には朝日がさし陽炎(かげろう)が立ちゆらめいている。振り返り西を見ると月が傾いている。

〔解説〕 軽皇子(かろのみこ=後の文武天皇)がまだ十歳の頃、奈良県宇陀野での狩猟の折、お伴の人麻呂が詠んだ短歌四首のうちの一首です。旧暦十一月の冬の情景が雄大かつ見事に詠み込まれています。また、この歌には皇位を継ぐことなく早世した父の草壁皇子と、この後に皇位を継ぐであろう子の軽皇子に対する宮廷歌人の人麻呂の思いが潜ませてあり、東から勢いよく昇る太陽が子であり、西に沈む月を父に例えたものだとする解釈もあります。

豊かな自然に恵まれた小川は、町なかからすぐのところに田畑や山林が広がります。日が昇り始める早朝、霜の降り立つ田んぼ道に立てば、人麻呂が見たであろう光景と心のふるえを覚えるのでは。

(6) 采女の袖吹きかへす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く

〔よみ〕 うねめの そでふきかへ(え)す あすかかぜ 都をとおみ いたづらに吹く  
巻一 五一 志貴皇子(しきのみこ)

〔大意〕 采女たちの袖をひるがえしていた明日香(京)の風、新都は遠くにあり、今はただ空しく吹いているだけ。

〔解説〕 采女(女官)は、赤い裳に白い広袖の上衣を正装にしていたとされます。天智天皇の子である皇子が、遷都によって棄てられた宮を訪れた後に詠んだ雑歌です。女官たちの衣擦れの音すら聞こえない廃墟を通り抜ける風は、皇子の心の中のすきま風でしょうか。

采女の衣も、どこかの里で紡がれ朝廷に貢がれた布地から仕立てられたのでしょうか。奈良の正倉院には、調(ちょう=朝廷への年貢)として小川の地から納められたとされる布地が収蔵されており、その布には、「(略)笠原里(略)調布一端」と墨書されています。

(7) 川の上の つらつら椿 つらつらに見れども飽かず 巨勢の春野は

〔よみ〕 川のへ(え)の つらつらツバキ つらつらに見れども  
あかず こせのはるのは  
巻一 五六 春日(かすがの)老(おゆ)

〔大意〕 川のほとり、花が連なり咲く椿、いつまで見ても見飽きない。巨勢の春の野は。

〔解説〕 古代、巨勢氏(こせ=奈良県御所市)は繁栄を誇っていましたが、大和朝廷内の氏族争いの中で敗れ去りました。今も巨勢は椿の名所となっています。緑の照葉の中に、赤い花が鮮やかに連なり咲いている様が目に浮かぶようです。韻を踏まえてテンポよく詠まれています。

小川には椿の群生地はありませんが、境内地などで藪椿を見ることができます。史跡も沢山あるので観光協会発行の地図を手に入れ、ハイキングコースを歩き四季折々の草花を訪ねてみましょう。



(8) 葦辺行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ



〔よみ〕 あしべゆく 鴨のはがひ(い)に 霜降りて 寒き  
ゆうべは やまとし思ほ(を)ゆ  
巻一 六四 志貴皇子(しきのみこ)

〔大意〕 葦の間を泳ぐ鴨の翼の先にも霜が降りているようだ。こんなに寒い夜は、ふるさとの大和がしきりに思い浮かばれてならない。

〔解説〕 そこはかたない哀愁を漂わせる皇子の歌。豊かな感性の持ち主は、どこにでもある自然の景色をもの見事、三十一文字に凝縮させています。皇子は、皇位継承争いや政争を避け、花鳥風月に生きる道を選んだようです。

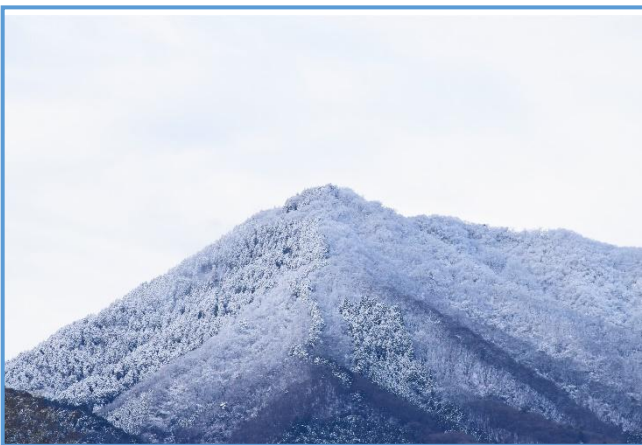
(9) 秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞 いつへの方に 我が恋やまむ

〔よみ〕 秋の田の 穂のへにきらふ(う) あさかすみ いつへのかたに あがこひ(い)やまむ  
巻二 八八 磐姫皇后(いわのひめのおおきさき)

〔大意〕 秋の田の稲穂の霧はやがて消えてゆきます。それなのに私のこの恋心は一体、いつになったら消えるのかしら。

〔解説〕 仁徳天皇と皇后との相聞歌(そうもんか)で、誰はばかりことなく、冷めることのない熱愛を吐露しています。貴女も磐姫のように、愛しい人に歌を送りませんか？

(10) 我が里に 大雪降りり 大原の 古りにし里に 降らまくは後



笠山の雪化粧はいとうるわし

〔よみ〕 わがさとに おお雪ふれり おおはらの  
ふりにしさとに ふらまくはのち  
巻二 一〇三 天武天皇(てんむてんのう)

〔大意〕 私の里には、大雪が降り積もったけど、君の住む大原は古くさい里だから、降るのはまだまだ後になるのだろうな。

我が岡の おかみに言ひて 降らしめし  
雪のくだけし そこに散りけむ

〔よみ〕 あがおかの おかみに言ひ(いて)  
ふらしめし 雪のくだけし そこに散りけむ  
(ん)

巻二 一〇四 藤原夫人(ふじわらのぶにん)

〔大意〕 私が、その古びた岡に祀る竜神様をお願いして降らせてもらいました！こちらの雪の碎けたほんのひとかけらが、そこに散らかったのかしら？

〔解説〕 皇宮と大原の里との間は、わずか700mほどの距離なので雪の降り方に違いはないでしょう。にもかかわらず、大雪が降ったもので二人ともまるで子どものようにはしゃいでいる。そんな情景が思い浮かびます。お互いに、我が里を自慢し意地を張り合いながら、小気味のよい相聞の歌にしました。見事！夫人の一本勝ち、かな。

笠山に雪が降ると、あたかも菅(すげ)笠に積もったかのように見え、神々しくもあります。

(11) 我が背子を 大和へ遣ると さ夜更けて 暁露に 我が立ち濡れし

〔よみ〕 あがせこを 大和へやると さよふけて あかときつゆに あが立ち濡れし  
巻二 一〇五 大伯皇女(おおくのひめみこ)

〔大意〕 大和に旅立つ弟を見送ったのちも、夜どおし立ち尽くしてしまいましたので、私は朝露にすっかり濡れてしまいました。

百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

〔よみ〕 ももづたふ(う) いはれの池に 鳴く鴨を けふ(きょう)のみ見てや 雲がくり(れ)  
なむ(ん)

巻三 四一六 大津皇子(おおつのみこ)

〔大意〕 磐余の池に鳴く鴨は今日が見納め。雲隠れすることになろうとはな。

〔解説〕 「百伝う」は枕詞で、磐余は奈良地方の古地名です。皇位継承をめぐり朝廷への謀反の罪を科せられ、悲嘆にくれた皇子の歌です。鴨のように大空を飛び回り、翌春を迎えることなく自害に追い込まれた皇子。享年二十四歳、姉の大伯皇女は二十六歳。

昔から町内には、多くの沼やため池があります。冬越しのために飛来した水鳥たちはそこで過ごし、昼は餌を求めて空に羽ばたき、夕べには水に浮かびながら春の訪れを待ちます。



(12) 人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ  
渡らぬ 朝川渡る

〔よみ〕 ひとつごとを 繁みこちたみ おのが世  
に いまだ渡らぬ あさかはわたる

巻二 一一六 但馬皇女(たじまのひめみこ)

〔大意〕 他人の噂や中傷はいやなので、私は生まれて始めて、早朝の川を渡るのです。

〔解説〕 皇女はすでに高市皇子(たけちのみこ)に嫁いでいましたが、穂積皇子(ほづみのみこ)と不倫関係に陥りました。夫が妻の家に

通い婚をする時代に、皇女は恋人の家で夜を明かし朝帰りする心を吐露したものです。

朝方の清冽な槻川の流れも、火照った身と 心の炎を静めるには良いかもしれません。

(13) 笹の葉は み山もさやに さやげども 我は妹思ふ  
別れ来ぬれば

〔よみ〕 ささの葉は み山もさやに さやげども  
われはいも思ふ(う) 別れきぬれば

巻二 一三三 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)

〔大意〕 笹の葉は風でさやめく、さやめきはざわめきに変わり、ざわめきが山をゆらすことはどうでもよい。私はただ、遠く別れて来てしまった妻のことを思うだけ。

〔解説〕 柿本人麻呂は後世、歌聖と呼ばれた万葉第二期の宮廷歌人です。しかし、何らかの出来事があり都落ちすることになったようです。人一倍の愛妻家であったろう人麻呂、泣く泣く都に妻を残し、遠く離れた全く人気のない山中において詠まれたものと思われまふ。そのような境遇に置かれたも、見事に韻を踏まえています。

笹は、町を取り囲む山中に自生しています。近くは、仙覚律師顕彰碑のある中城跡にも。瞼を閉じて、笹の葉のさやめきが聴こえたならば、詠み人の心に近づけるかも。



白い隈(くま)があるクマザサ

(14) 岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば また帰り見む



飯が盛れるマテバ椎の大きな葉

〔よみ〕 いは(わ)しろの 浜松がえを 引き結び まさきくあらば  
またかへ(え)りみむ(ん)

巻二 一四一 有間皇子(ありまのみこ)

〔大意〕 岩代の浜の松の枝を引いて結ぼう。もし無事に帰れることができたならば、またこれを見よう。

家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

〔よみ〕 いへ(え)にあれば けに盛るいひ(い)を くさまくら  
旅にしあれば しひ(い)の葉に盛る

巻二 一四二 有間皇子(ありまのみこ)

〔大意〕 家にいたら筥(薄板を曲げて作った食器)に盛っていた  
だくご飯を、旅先の身なので、椎の葉に盛ります。

〔解説〕 詠み人は孝徳天皇の皇子です。蘇我赤兄の奸計にはまり、謀反の罪で捕らえられた皇子は、齊明天皇の湯治先に同行している中大兄皇子のもとへと送られ詰問を受けたようです。その帰路、都の土を踏むことなく絞首刑に処されました。享年十九歳。

この二首は、護送の途中に詠まれた自傷の歌と記されています。わが身を傷つけるほど強く松の枝を結びながらも、我を葬ろうとする権謀術策の黒幕への恨みや呪詛の言霊を全く含みません。淡々と詠い、生への望みを表わすことで、検閲を受けても残る歌に仕立てたのでは。巻二の編者はその意を汲み、鎮魂するためにでしょうか、挽歌に類し冒頭歌に選んでいます。

縁起の良いとされる松、浜辺には潮風に強い黒松(男松)が多く、小川では赤松(女松)が多く自生しています。建材としてや、薄く削(そ)ぎ経木や曲げ物など多用途に使われる木です。

(15) 山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに  
行かめど 道の知らなく

〔よみ〕 やまぶきの 立ちよそひ(い)たる 山  
しみづ(ず) くみにゆかめど 道の知らなく

巻二 一五八 高市皇子(たけちのみこ)

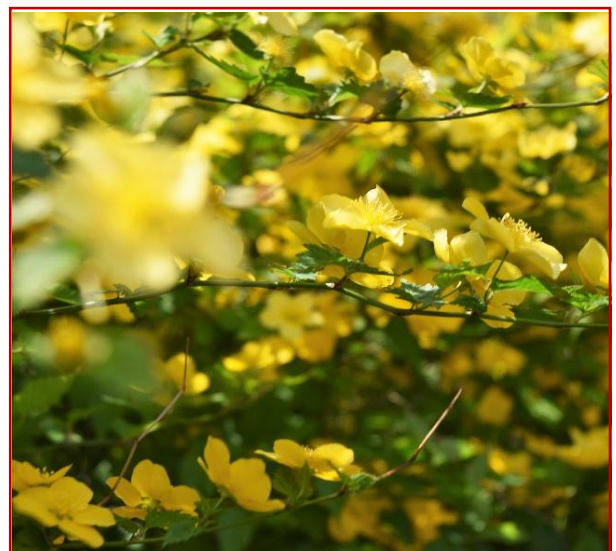
〔大意〕 山吹の花が装いを添える、山の清水を  
汲みに行きたいが、行く道が分かりません。

〔解説〕 十市皇女(といちのみこ)の急死を悼み、弟の皇子がささげた挽歌三首の一つです。

「黄泉(よみ)」を、山吹の花色と清水(泉)で  
言い表したと解され、黄泉の国には慰めに行き  
ようもないもどかしさを嘆いたのでしょうか。

町を象徴する笠山、別名「乳首山」の中腹の栗  
山地区には、「延命水」と呼ばれる名水があります。

深い山ひだを伝い湧き出す水は夏でも冷たく、これを求めて県外からも汲みに来ています。



湿地を好み溪流沿いに自生している

(16) 高円の 野辺の秋萩 いたづらに 咲きか散るらむ 見る人なしに



〔よみ〕 たかまと(ど)の のへ(べ)のあきはぎ  
いたづらに 咲きか散るらむ(ん) 見る人なしに  
巻二 二三一 笠金村(かさのかなむら)

〔大意〕 高円山の野辺の秋萩は、咲いては無駄花  
となって散りこぼれているのであろう。愛でてく  
れる人はもういないのに。

〔解説〕 徳の高い志貴皇子は、官位を望まずに花  
鳥風月を愛したようです。皇子の薨去(こうきよ＝  
皇族の死)に、人々は慟哭し雨のように泣を流し、  
宮廷歌人は長歌でその死を悲しみ、引き続き挽歌  
を詠みました。皇子も萩を好んだようですが、六

首残る歌には詠まれていません。萩は最も数の多い、百四十二首詠まれています。

町の文化財となっている、武田氏一族の墓域(寺社07)のある輪禅寺は萩の名所です。秋  
に花が咲き、そして散りこぼれる様は美しくもあり、もののあわれを感じます。

(17) 隼人の 薩摩の瀬戸を 雲居なす 遠くもわれは 今日見つるかも

〔よみ〕 はやひとの さつまのせとを くもみ  
(い)なす 遠くもわれは けふ(きょう)見つる  
かも

巻三 二四八 長田王(ながたのおおきみ)

〔大意〕 隼人の薩摩の早瀬は雲が沸き立つと  
ころだという。私は、そのような遠い地の果てを  
今日見ることになるかもしれない。

〔解説〕 長田王は実際に九州赴任したよう  
です。万葉集で詠まれた最南端とされるこの地  
は、天草諸島と九州本島の狭い海峡を指してお  
り、潮の流れはとても速く航海の難所となっ  
ています。

入道雲、ウロコ雲、筋雲、あかね雲、雲は四季折々、刻々色や形を変えます。はたして詠み  
人はどのような雲を見たのでしょうか。



(18) 天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ

〔よみ〕 あまざかる ひなのながちゆ こひ(い)くれば あかしのとより やまとしま見ゆ  
巻三 二五五 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)

〔大意〕 果てしなく遠い辺境の地からの長旅、恋しい思いでたどりついた明石海峡、彼方  
には大和の山々が見える。

〔解説〕 古代の旅は危険にさらされることが多く、特に船路ともなると死をも覚悟したこ  
とでしょう。小舟は波にもまれ、風と潮の流れを読めないと前には進みません。

(19) 近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに いにしへ思ほゆ

〔よみ〕 あふ(おう)みの海 ゆふ(う)なみちどり なが鳴けば 心もしのに いにしへ思ほ(お)ゆ

巻三 二六六 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)

〔大意〕 近江の海の夕波千鳥よ、お前が鳴くと私まで哀しく、遠い昔のことが偲ばれる。

〔解説〕 古来より江戸期までは、都に近い琵琶湖のある国を近江、遠く浜名湖のある国を遠江(とおとうみ)と呼んできました。天智天皇は飛鳥から近江の湖畔に遷都し、大津宮を造営しました。しかし、そのわずか五年後、次の天皇はまた飛鳥に遷都しています。

廃墟と化した地にたたずみ黄昏時の湖の方には、引いては寄せる波と戯れる千鳥が浜辺を走り廻っている。その鳴き声は、とても物悲しく聞こえたのでしょうか。

「万葉集注釈」を編纂した仙覚律師が、麻師宇郷(ましろごう=小川町増尾)に移り居を構えたとされる地には、この歌が詠まれた時代に造られた、「穴八幡古墳」(歴史02)と呼ばれている古墳があります。律師の生きた鎌倉時代には、四角い原形をとどめていたのでしょうか。

(20) 桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市潟 潮干にけらし 鶴鳴き渡る

〔よみ〕 さくらだへ たづ鳴き渡る  
あゆちがた しほひにけらし 鶴鳴  
き渡る

巻三 二七一 高市黒人(たけちのくろひと)

〔大意〕 桜田の方へ鶴(ツル)が鳴いて飛んで行く。年魚市潟(地名)では海水が引いたのか、餌を求め鶴が鳴き渡って行く。

〔解説〕 桜田は今の名古屋市元桜田町あたりで、当時は自然豊かな干潟であったのでしょうか。万葉集では、桜は地名を含めて四十六首詠まれています。小川町には槻川河畔の桜、

東昌寺のしだれ桜(寺社06)、中城跡(城02)周辺など桜の名所がたくさんあります。郊外の山並みの淡い新緑の中に咲く遠山桜も見事です。



槻川の矢岸橋と桜並木

(21) 田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける

〔よみ〕 たごの浦ゆ うちいでて見れば ましろにぞ 富士のたかねに 雪は降りける  
巻三 三一八 山部赤人(やまべのあかひと)

〔大意〕 田子の浦から、うち出て見上げてみると真っ白ではないか。富士の高嶺に雪が降り積もっている。

〔解説〕 作者は万葉第三期の叙景歌人。眺望のきく海岸から、青海原の向こうにそびえ立つ

白富士を前にした感動をストレートに表現した名歌です。

晩秋から冬になり空気が澄みわたってくると、東上線列車の窓越しから富士山の美しい姿を眺められるビューポイントが数か所あります。スマホ画面より、絶景を楽しみましょう。

(22) あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり

〔よみ〕 あを(お)によし 奈良の都は 咲く花の にほふ(おう)がごとく 今盛りなり

巻三 三二八 小野老(おののおゆ)

〔大意〕 奈良の都は、百花咲き乱れ、匂い立つように、今繁栄の最中にあります。

〔解説〕 詠み人は、大伴旅人が大宰府に派遣されていたときの部下の者。旅人の屋敷で催された宴において詠んだ歌です。薫を放つ花の名はわかりません。老に続き詠まれた、大伴四綱の歌(三三〇)には、いま盛りを迎えた藤の花穂のたなびく様子が詠われていることから、季節は梅や桜の花を過ぎた初夏と考えられます。甘い香りに誘われて藤の花を詠んだのか、それとも都を旅立つときの繚乱の花を詠ったのか？仇敵の下り藤をほめるなんぞ酩酊したか？などと想いめぐらせるのも楽しい。

宴に会していた者たちはみな、老の都からの土産話を肴に酒を酌み交わし、歌を吟じあったのではないのでしょうか。花の都には、およそ二十万人が暮らしていたと推定されています。なお、「あをによし」は奈良に掛かる枕詞です。

仙覚律師も鎌倉や麻師宇(ましう＝増尾)の郷にあって、梅や様々な花の美しさや香りを楽しんだのかもしれませんが。あなたも観光協会発行の地図を手にして、花めぐりをしませんか。

(23) 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ

〔よみ〕 おくらはは 今はまからむ(ん) 子泣くらむ(ん) それその母も わを待つらむぞ

巻三 三三七 山上憶良(やまのうえのおくら)

〔大意〕 憶良は、もうおいとましますよ。家では幼子が泣いて、その母親も私の帰りを待ちわびていますから。

〔解説〕 憶良は、当時大宰府長官を務めた大伴旅人(おおとものたびと)と同じころに、筑前(福岡県)の国司(県知事相当)に赴任しました。万葉第三期の歌人で遣唐使にもなり、仏教や儒教にも精通していたとされる有職(ゆうそく)の人。宴たけなわの最中に、この歌を残しサツサと座を辞してしまったとしたら、主の旅人を始め居並ぶ人々はさぞかし啞然とし、苦笑いしたことでしょう。そして、その理由が歌のとおり、泣き止まぬ幼子と子守に疲れた妻が帰りを待ちわびているからとは。

(24) 駿なき ものを思はずは 一杯の

濁れる酒を 飲むべくあるらし

〔よみ〕 しるしなき ものを思は(わ)ずは  
ひとつきの にごれる酒を 飲むべくある  
らし

巻三 三三八 大伴旅人(おおとものた  
びと)

〔大意〕 何ら兆しの現れないことを思い  
煩うくらいなら、一杯の濁酒(どぶろく)で  
も飲んでいた方がよいではないか。

〔解説〕 旅人は名門大伴氏の長です。藤  
原氏の台頭によって、大伴氏は次第に政  
治力を弱められていきました。そうした時  
の流れのなかで詠まれています。やるせ  
ない気持を酒で紛らし、歌に託したのでし  
ょうか。旅人のため息さえ聞こえそうです。

詠み人が憂さ晴らしに飲んだ酒は、今でも造られている、「どぶろく」と呼ばれる濾過して  
いないため白く濁り、甘酸っぱい味をしたものだと思います。ここ小川も酒造りに適した良  
質な地下水が豊富であり、盆地特有の気候は、関東灘と呼ばれ比されるほどの醸造所を育  
てました。今でも、「帝松」、「晴雲」、「武蔵鶴」の造り酒屋(観光08~11)があります。



甘酸っぱい味がする濁り酒

(25) 君待つと 我が恋ひ居れば 我が宿の 簾動かし 秋の風吹く

〔よみ〕 君待つと あが恋を(お)れば わが宿の すだれ動かし 秋の風吹く

巻四 四八八 額田王(ぬかたのおおきみ)

〔大意〕 あなたをお待ちしていると、私の恋ごころは、わが家のすだれを秋風がいたずらし  
て揺らすだけで胸キュンキュン。

風をだに 恋ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ

〔よみ〕 風をだに こふ(う)るはともし 風をだに こむ(ん)とし待たば 何か嘆かむ(ん)

巻四 四八九 鏡王女(かがみのおおきみ)

〔大意〕 風にさえ、胸キュンキュンするなんて、うらやましい。(私なんて)風さえ来てくれない  
かと待ちわびているのに、(あなた)何も嘆くことないジャナイ。

〔解説〕 天智天皇の妻問い(通い婚)を待つ妹の額田王と、姉の鏡王女の相聞歌です。風と恋  
を題にして、まるで少女のように胸をときめかす妹に対して、姉が私のところには風も吹い  
てくれないとユーモアを交え、温かく応えていますね。

簾は竹を細く割き生糸で編んだもので、風通しが良く日よけや目隠しとして現代も使われ  
ています。また、和紙を漉く際には欠かせない道具です。こちらは「簾」の字が使われます。

(26) 相思はぬ 人を思ふは 大寺の  
餓鬼の後方に 額つくごとし

〔よみ〕 あひ(い)おもは(わ)ぬ 人  
を思ふ(う)は おほ(お)てらの が  
きのしりへ(え)に んかつ(づ)くご  
とし

巻四 六〇八 笠女郎(かさのいら  
つめ)

〔大意〕 片思いなのに、これほど貴  
男のことを思いわずらうなんて、大  
寺の餓鬼の像の後ろから、ひれ伏し  
て拝むようなものですね。

〔解説〕 笠女郎は奈良時代きっての  
万葉第四期の女流歌人といわれます。

大きな寺には、六道のうちの一つ餓鬼道に落ちた亡者の像が、戒めのために置かれました。大伴家持に恋慕する女郎は、自らのみじめな姿と苦しい胸の内をさらけ出して詠い、この歌を含めて二十四首贈っています。家持からの答歌を調べて恋の行方を探してみましょう。

町には寺院や祠(ほくら)がたくさんあります。安産、子育ての観音様として広く信仰を集めている下里の大聖寺(だいしょうじ(芭蕉03))もその一つです。



下里の子育て観音堂

(27) 夕闇は 道たづたづし 月待ちて 行ませ我が背子 その間にも見む

〔よみ〕 ゆふ(う)やみは 道たづたづし 月待  
ちて いませわがせこ そのまにも見む(ん)  
巻四 七〇九 大宅女(おおやけめ)

〔大意〕 夕暮れ時は暗く、足元がたどたどし  
いわ。月の出を待ってお帰りください。その  
間もずっとあなたを見つめていたい。

〔解説〕 作者は豊前(ぶぜん)の国の娘子(む  
すめ)ですが、伝未詳となっています。

夕闇がいよいよ迫り、もう帰るからと立膝  
をつく夫。その耳元に甘く囁き、手を握りしめ  
て、ほんの少しでも長く寄り添おうとする妻。  
そんな愛の情景を思い浮かべてしまう歌です。

万葉の風土・文学研究の第一人者、犬養孝博士は、旧制高校在学中の試験問題でこの歌に出会い、直感的にその意と生々しさを感じ取り、万葉歌を研究するきっかけになったといいます。博士は、歌が詠まれた土地1200か所を自らの足でくまなく歩き、その気候風土と背景から歌を読み解く、「万葉風土学」を確立しました。さらに、万葉故地(こち)の保存活動にも奔走し、その重要性を政財界に訴え続け、故地に造立された博士揮毫の歌碑は130基以上にもなります。



(28) 銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子にしかめやも



おこづかいを握りしめ「どれにしようかな」(昭和の時代)

〔よみ〕 しろがねも く(こ)がねもたまも  
何せむ(ん)に まされる宝 子にしかめやも  
巻五 八〇三 山上憶良(やまのうえのおくら)

〔大意〕 金銀も宝玉も一体何の役に立つだろうか。子どもに勝る宝などあるものか。

〔解説〕 憶良が筑紫へ赴任したのは六十七歳のとき。金銀・宝石は美しく輝いていても包丁や金槌にもならない役立たずのものと切り捨て、子どもこそ真の宝玉であると称えています。

この町の宝も子どもたちです。子どもたちが健やかに育ちますようにと、憶良のように皆さんも願い、見守りましょう。

(29) 梅の花 夢に語らく みやびたる  
花と我れ思ふ 酒に浮かべこそ

〔よみ〕 梅の花 いめに語らく みやびたる  
花とあれおもふ(う) 酒に浮かべこそ  
巻五 八五二 大伴旅人(おおとものたびと)

〔大意〕 梅の花が夢に出てきて語るには、「みやびやかな花こそ私なのだと思います。盃に浮かべてごらんなさいな。」と。

〔解説〕 旅人が宴の最中、酔に任せて詠んだ即興の歌、粋ですな。お酒に梅や桜、菊の花びらを浮かせて楽しむ雅びは万葉の頃から続けられています。

梅や桜の花を愛(め)でるには、昔も今もお酒はつきもの。あなたも小川の旨酒を堪能したいと思いついたら、観光協会発行の地図を手に入れ、酒蔵巡り(観光08~11)をしながら梅の花を訪ね歩きましょう。ただし、くれぐれも千鳥足となりませんように！



(30) 若の浦に 潮満ち来れば 潟をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る

〔よみ〕 若の浦に 潮満ちくれば かたをなみ あしへ(べ)をさして たづ鳴き渡る  
巻六 九一九 山部赤人(やまべのあかひと)

〔大意〕 若の浦に潮が満ちてくると、砂浜からほかの葦辺を目指し、ツルの群れは鳴きながら移っていく。

〔解説〕 聖武(しょうむ)天皇の紀伊行幸にお伴をした赤人の歌です。干潟にいたのは、おそ

らく真鶴(マナヅル)か鍋鶴(ナベヅル)。その群れが鳴き声を上げて、一斉に飛翔する姿が目  
に浮かびます。いまや絶滅危惧種に指定されており、鹿児島県出水市が主な飛来地です。

町内を流れる川や田んぼで雑魚などをあさるサギをよく見掛けます。ツルに似た姿をして  
いますが、飛びながらギャーッ!と絶叫するような濁った鳴き声は不気味で耳障りなもの。  
ツルの四十七首の歌に対し、サギは一首のみしか詠われていないのは、その鳴き声のせいか。

(31) み吉野の 象山の際の 木末には ここだも騒く 鳥の声かも

〔よみ〕 み吉野の きさやまのまの こぬれには ここだも騒く(ぐ) 鳥の声かも  
巻六 九二四 山部赤人(やまべのあかひと)

〔大意〕 吉野の山奥にある象山の谷間の木々の梢には、ここだとばかりに騒がしく鳥が鳴き  
声を上げている。

ぬばたまの 夜の更けゆけば 久木生ふる  
清き川原に 千鳥しば鳴く

〔よみ〕 ぬばたまの よのふけゆけば ひさぎ  
おふ(う)る 清き川原に ちどりしば鳴く

巻六 九二五 山部赤人(やまべのあかひと)

〔大意〕 夜がしんしんと更けていくと、久木が  
茂る吉野の河原に、千鳥がしきりに鳴く。

〔解説〕 この二首は長歌を踏まえた反歌になっ  
ており、赤人が山と川を主題とし、朝と夜を対  
比し詠んでいます。共通するのは静寂を破る鳥  
のやかましい鳴き声です。

「ぬばたまの」は、ここでは夜を導く枕詞とし  
て用いられています。ぬばたまはヒオウギ(檜扇、アヤメ科の多年草)の実を指します。夏にオ  
レンジ色の花弁に朱の斑点の入った小花を咲かせ、やがて漆黒の実を付けることから、夜や  
暗闇、黒い色を連想させるための枕詞となり、「ぬばたまの」を用いた和歌は相当な数になり  
ます。

ヒオウギという名の由来は、「檜(ヒノキ)」の薄板を重ね合わせて作られた、「檜扇」と呼ば  
れる扇を広げた形と、この植物の特徴といえる剣状の葉が互生し重なりあった形が似ている  
ことから付けられたとされます。

万葉集ではヒオウギの実が枕詞として数多く用いられているものの、ヒオウギそのものを  
詠んだ歌が一首もないというのも面白いですね。またヒオウギは、平安時代に始まったとさ  
れる京都の祇園祭には欠くことのできない植物であり、今でも、祭り時期に合わせて町屋衆  
が展示する屏風などの美術工芸品とともに、青々とした葉を生けて涼を呼び寄せます。

久木はアカメガシワとされ、その実を食べた鳥の糞からも勝手に生えて繁茂します。また、  
樹皮や葉は民間薬として用いられてきました。



アカメガシワはその名の通り新芽が赤い

(32) 道の辺の 草深百合の 花笑みに 笑みしがからに 妻と言ふべしや

【よみ】 道のへの 草ぶかゆりの  
花ゑ(え)みに ゑ(え)みしがから  
に 妻と言ふ(う)べしや

巻七 一二五七 作者未詳

【大意】 道端の草むらに咲いている百合が笑みをたたえて見えるように、私が微笑みながら会釈しただけで、妻に決めたと言い張るのですか。

【解説】 この詠み人の女性のたてる笑みは、きっと多くの男性の心を惑わせたのでしょうか。序からの優雅さ漂う言葉の流れに対して、終わりは、思い込みの激しい男の求婚を、百合の花に例えてサラッと断るという、ユーモアと軽快さを織り込んだ歌に仕立てあげています。

この町では少し足を伸ばして里山に分け入ると、山百合が花笑みを浮かべて出迎えてくれます。野の花は野にあってこそ美しく咲くものなので、どうか摘むことなく愛でてください。



(33) 月草に 衣は摺らむ 朝露に 濡れての後は うつろひぬとも

【よみ】 つきくさに ころもはすらむ(ん) あさつゆに  
ぬれてののちは うつろひ(い)ぬとも

巻七 一三五― 作者未詳

【大意】 露草(月草)で衣を摺り染めにしよう。朝露に濡れて色あせたとてかまわぬではないか。

【解説】 そのまま解釈すると他意のない清々しい歌となり、裏を探ると、「今は恋(露草)に染まろう、翌朝にはそれが冷めてもよいではないか」と平然に言っているのけています。それにしても草木染に例えて歌う技巧は見事ですが、詠み人はさぞかし浮気性なのでは。万葉集中、恋ごろの移ろいを詠じた歌九首のうちの一つとされています。

町のどこにでも見られる露草の花は、朝に咲き夕べを待たずして萎れるはかなさ。青い花卉は古代より布の摺り染めに使われ、露草色として親しまれてきました。



(34) 石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも

〔よみ〕 いは(わ)ばしる たるみの上の さわらびの  
もえいづ(ず)る春に なりにけるかも

巻八 一四一八 志貴皇子(しきのみこ)

〔大意〕 岩を割き流れ落ちる滝水の上には蕨(ワラビ)の新芽が……。萌え出す春になったのだな。

〔解説〕 万葉集巻八の冒頭の名歌です。その抒情的な光景がすぐに浮かんできます。後の光仁天皇はこの志貴皇子の子供で、やがて政権は天武系からまた天智系に変わります。

シダの仲間のワラビの新芽はとても強い苦みがあります。しかし、古代の人々は、あく抜きやでん粉(ワラビ粉)の抽出方法を見出し食用としてきました。町内の山野に自生しています。



(35) 春の野に すみれ摘みにと 来し我れぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける



〔よみ〕 春の野に すみれつみにと こし  
われぞ 野をなつかしみ ひとよねにける  
巻八 一四二四 山部赤人(やまべのあ  
かひと)

〔大意〕 春の野にすみれの花を摘みに来た私ですが、野辺のあまりの美しさに心を奪われてしまい、一夜を野で過ごしてしまいました。

〔解説〕 山部氏はもともと山を管理する氏族で、赤人は野宿してしまうほど自然の

野山を愛し、人の心を大事にした歌人です。

日本在来種のすみれの小さく可憐な花は春の訪れを告げます。野辺や家の回りでも見ることのできるなじみの深い花。種類も豊富なので、花びらの色や形、葉の形の違いを観察してみましょう。



(36) **かはづ鳴く 神なび川に 影見えて 今か咲くらむ 山吹の花**

〔よみ〕 かはづ(ず)なく かむ(ん)なびがはに 影見えて 今か咲くらむ(ん) やまぶきの花  
巻八 一四三五 厚見王(あつみのおおきみ)

〔大意〕 カジカが鳴く神なび川の清流に、影を映して、今頃は咲いているだろうか、山吹の花よ。

〔解説〕 「かわづ」とは清流に棲む河鹿蛙(カジカガエル)のことです。ヤマブキの花の咲くころ、繁殖期に入ったオスは、「フィフィフィフィフィ」と澄んだ美しい声で鳴きメスに求愛します。かはづのメスならずとも、思わず歩を止め聞き惚れてしまいます。

神なび川は、神様の鎮座する山から流れ出る川の名前です。この歌の「影見えて」、「今か咲くらむ」という表現を引用した「本歌取り」の歌が後世、いくつも生まれました。

槻川の上流や支流の金嶽川や館川には、その河鹿蛙が棲んでいます。あなたも美しい鳴き声を聴いてみたいと思いませんか。



そよ風にすらたなびく繊細な花

(37) **昼は咲き 夜は恋ひ寝る 合歓木の花  
君のみ見めや 戯奴さへに見よ**

〔よみ〕 昼は咲き よるはこひ(い)ぬる ねぶの花 君のみ見めや わけさへ(え)に見よ  
巻八 一四六一 紀女郎(きのいらつめ=小鹿(おしか))

〔大意〕 昼間は咲き、夜は愛し合って眠る合歓木(ねむのき)の花を、君一人で見めるものではない。そなたも一緒に見なさい。

〔解説〕 この歌は紀女郎が、かなり年下の大伴家持(おおとものやかもち)へ送ったものです。ここでは女郎自身が「君」となり、家持に私と一緒に見よと命令口調で呼びかけています。二人の間の歌のやり取りは、十年以上も続きました。

合歓は夏になると淡紅色の美しい花を咲かせます。羽根状の複葉の葉は、夜を迎えるとピツタリと合わさり眠りに就きます。家持を愛してやまない年上の人、歌とはいえ人目をはばかることなく大胆ですね。

(38) 夏の野の 茂みに咲ける 姫百合の 知らえぬ恋は 苦しきものぞ

〔よみ〕 夏の野の しげみに咲ける ひめゆりの 知らえぬこひ(い)は 苦しきものぞ  
巻八 一五〇〇 大伴坂上郎女(おおとものさかのうえのいらつめ)



ヘメロカリスのあでやかさ

〔大意〕 夏の野の草むらにひっそりと咲くヒメユリのように、好きな方に気づいてもらえぬ恋はつらいものです。

〔解説〕 作者は大伴旅人(たびと)の異母妹で、家持(やかもち)の叔母に当たりますが、後に娘の坂上大嬢を嫁がせ、姑として家持を後見しました。女性歌人としては、最も多くの歌を万葉集に残しました。秘めたせつない恋ごころを、ヒメユリにたとえて詠みあげています。

自然豊かな小川ですが、ヒメユリは自生していません。今は園芸品種の球根が入手できるので自宅で育ててみてはいかがでしょうか。また、

青山地区にある農園ではユウスゲの改良種のヘメロカリスが有名で、花の季節になるとテレビ放映されることも度々。英名ではデイリリーと呼ばれているように、花は一日でしおれてしまいますが、多花性なので次つきと咲かせて見応え十分。

(39) 夕されば 小倉の山に 鳴く鹿は 今夜は鳴かず 寝ねにけらしも

〔よみ〕 ゆふ(う)されば を(お)ぐらの山に 鳴く鹿は こよひ(い)は鳴かず いねにけらしも

巻八 一五一 舒明天皇(じよめいてんのう)

〔大意〕 いつも夕方になると小倉の山の辺りで鳴く鹿が今宵は鳴かない。寝てしまったのかもしれない。

〔解説〕 雑歌に分類されるこの歌は、舒明天皇が秋に詠んだとされますが、岡本(おかもと)天皇の作ともいわれています。それは、舒明天皇とその皇后で後の斉明天皇が飛鳥岡本宮に皇宮を置いたためです。また、酷似した、雄略天皇の歌が巻九に収められています。

なお、国や研究機関による生態調査報告書を読むと、野生のニホンジカは昼夜を問わず常にエサを求めて活動していると記述されています。そして、オスは秋の繁殖期を迎えると縄張り争いを行い、求愛のために独特の鳴き声をあげるそうです。すると、小倉の鹿が急に鳴かなくなったのは寝たのではなく、ただ繁殖期を過ぎただけだと解すべきですが、これでは風情も何もありませんね。ここは、つがいで眠りについたことにしておきますか。

昨今、鹿がエサを求めて高冷地の国立公園にまで生息域を広げ、貴重な高山植物を食い荒らして絶滅させる危険があると伝えられています。さらに、絶滅させる前に害獣である鹿を駆除すべきだとする意見があります。しかし、鹿にとっては一番の天敵であった日本狼を、日本人は憎悪し絶滅させ食物連鎖の一つを壊した罪過があるのです。今、その因果応報を受けているのだとも気づかずに。

(40) 彦星し 妻迎へ舟 漕ぎ出づらし  
天の川原に 霧の立てるは

〔よみ〕 ひこほしし つまむかへがね  
こぎいづらし あまのかは(わ)らに  
霧の立てるは

巻八 一五二七 山上憶良(やまのう  
えのおくら)

〔大意〕 彦星が妻を迎える舟を漕ぎだ  
したようだな。その水しぶきが霧とな  
り、天の川原に立ち込めている。

〔解説〕 七夕は、七月七日の夜に星を  
祭る年中行事です。中国伝来の風習と  
日本の神を待つ、「棚機津女(たなばた  
つめ)」の信仰が習合(しゅうごう)した

とされ、遠く奈良時代に宮中で行われた乞巧奠(きっこうでん)に起源を持ちます。

小川町の七夕まつりは、昭和二十四年に始まりました。色とりどりに染められた和紙で作られた飾り物や願い事を書いた短冊を結んだ竹飾りが沿道の軒の先々に立てかけられ、道行く人の目を奪います。まさに和紙の町を象徴し、目を楽しませる祭りとなっています。



短冊にどんな願いを書いたのかな？(昭和の時代)

(41) 萩の花 尾花葛花 なでしこの花 をみなへし また藤袴 朝顔の花



〔よみ〕 萩の花 を(お)ばなくずはな なでしこの花  
を(お)みなへ(え)し またふぢ(じ)ばかま 朝顔の花  
巻八 一五三八 山上憶良(やまのうえのおくら)

〔大意〕 萩、薄、葛、撫子、女郎花、そして藤袴、朝顔

〔解説〕 秋の七草をただ列挙しただけのものですが、  
旋頭歌(五・七・七、五・七・七)に仕立てることにより、  
口ずさみたくくなるような軽快感が生まれています。



香しきかな葛の花

朝顔は今日の桔梗(キキョウ)とされ、秋の野に咲く代表的な草花です。尾花とは、動物の尾に似ているためそう呼ばれています。十五夜の頃、葛の大きな葉が生い茂る小道を歩くと甘い香りが漂ってきます。その主、赤紫の花の房を見つけたら嗅いでみましょう。また、平安時代の貴族は、藤袴を乾かし香水の代わりに用いました。

(42) 夕月夜 心もしのに 白露の 置くこの庭に こほろぎ鳴くも

〔よみ〕 ゆふ(う)づくよ 心もしのに しらつゆの 置くこの庭に こほ(お)ろぎ鳴くも  
巻八 一五五二 湯原王(ゆはらのおおきみ)

〔大意〕 月が昇る夕暮れ時はしんみりとしてくる。白露の降り立つこの庭にコオロギが鳴く。

〔解説〕 湯原王は志貴皇子の第二皇子です。写実的な詠風で、清純な抒情が高く評価されています。

エンマコオロギは「コロコロリー」、ツカドコオロギは「ジキジキッ・ジキジキッ」と鳴きます。庭先の茂みにもいて音色を聴くことができるので、秋の夜長を楽しんではいかがですか。

(43) 常世辺に 住むべきものを 剣太刀 汝が心から おそやこの君

〔よみ〕 とこよへ(べ)に 住むべきものを つるぎたち なが心から おそやこの君  
巻九 一七四一 高橋虫麻呂(たかはしのむしまろ)

〔大意〕 不老不死の仙境の身であったのに、自らの考えでふいにしてしまうとは、愚かなお人(浦島)だよ。

〔解説〕 長歌一七四〇(虫麻呂の作)に添えられた反歌になっています。歌中の「剣太刀」は枕詞であり特別な意味はありません。長歌は、浦島という人物を主人公にした創造性豊かな物語になっています。後世、「浦島太郎」のおとぎ話へと発展し、現代まで伝えられている物語の原型なので興味を持たれた方は調べてはいかがでしょうか。

町にも百話を超える民話や伝説が語り継がれています。町立図書館のホームページをご覧ください。→[小川町立図書館 HP「民話と伝説」](#)

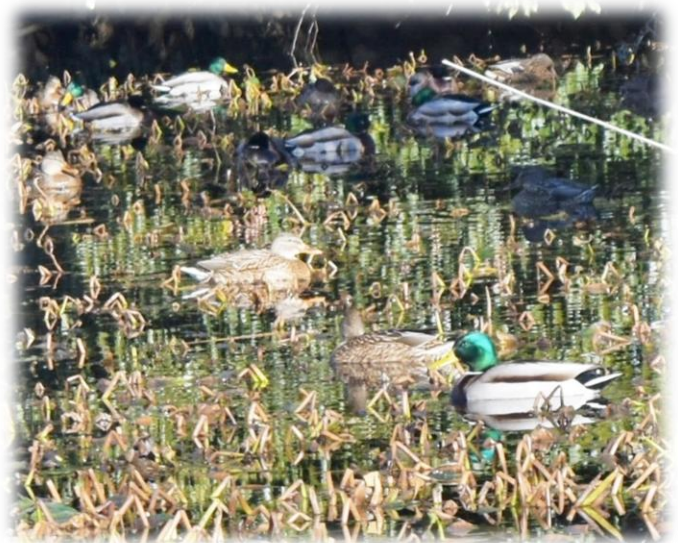
(44) 埼玉の 小崎の沼に 鴨ぞ翼霧る  
己が尾に 降り置ける霜を 掃ふと  
にあらし

〔よみ〕 さきたまの を(お)さきの沼に  
鴨ぞはねきる おのが尾に 降り置ける  
霜を はらふ(う)とにあらし

巻九 一七四四 高橋虫麻呂(たかはしのむしまろ)

〔大意〕 埼玉の小崎の沼に鴨が羽ばたきをしている。自分の尾に降りた霜を払おうとしているのだ。

〔解説〕 この旋頭歌(せどうか)は、埼玉(さきたま=現在の行田市埼玉)の情景



を詠んだ歌です。ここには稲荷山古墳を代表とする巨大古墳群があります。すぐ近くの小さな森の中に小崎沼はありますが、今はほぼ干上がってしまいました。古墳群の一角には、前玉(さきたま)神社があり、日本最古といわれている万葉歌が刻まれた一対の灯籠が据えられています。また、県立さきたま史跡の博物館の入口には、「埼玉県名発祥の碑」が建てられています。

鴨は、冬になると町内の溜池や沼にも飛来し、春まで群れて暮らします。万葉の頃からの子孫もいるカモ。

(45) 春されば まづ三枝の 幸くあらば 後にも逢はむ な恋ひそ我妹

〔よみ〕 春されば まづさきくさの さきくあらば のちにもあはむ(ん) なこひ(い)そ(ぞ) わぎも

巻十 一八九五 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)歌集

〔大意〕 春になると先ず縁起のいい三枝(さきくさ)が咲く。若し無事であったらいつかきつと会えるはずだし、そんなに心を痛めないでおくれ、愛しい我が妻よ。

〔解説〕 離ればなれに暮らす愛しの妻(恋人?)との間の相聞歌です。どうも返歌がなさそうなので片思いに終わったのかもしれませんが。三枝はミツマタと呼ばれる落葉灌木で、春に黄色い小花が塊となって咲き、楮(こうぞ)とともに木の皮は和紙の原料となります。

(46) 道の辺の いちしの花の いちしろく 人皆知りぬ 我が恋妻は



槻川腰越堰付近の彼岸花

〔よみ〕 道のへ(べ)の いちしの花の いちしろく 人皆知りぬ あがこひ(い) づまは

巻十一 二四八〇 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)歌集

〔大意〕 路傍に咲くいちしの花が目立つように、私がいつもあなたを愛おしく振舞っているから皆に知れてしまったよ。

〔解説〕 たくさんの植物が詠まれる中、いちしの花はこの一首しか詠まれてい

ません。そのため、エゴの木などの白い花だとする諸説があり定かではありませんでした。しかし、昭和22年、植物学界の権威者である牧野富太郎博士(令和5年9月まで放映していたNHK朝のドラマ「らんまん」の主人公のモデル)が、短歌結社誌「アララギ」に彼岸花説を提唱したことがきっかけとなり、今日では彼岸花説が支持されています。ところで、この呼名は北九州と山口県の一部地方の方言であり、人麻呂が筑紫に赴任したときにこの歌を採録したのでしょうか。いずれにしても謎の多い歌人です。

赤く燃えるように群生して咲く彼岸花は、町の美しい秋の田園風景の一つです。花の時期だけその存在を主張します。

(47) 新室の 壁草刈りに いましたまはね 草のごと 寄り合ふ娘子は 君がまにまに  
〔よみ〕 にひ(い)むろの 壁草刈りに いましたまは(わ)ね 草のごと 寄り合ふ(う)を(お)  
とめは 君がまにまに

卷十一 二三五一 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)歌集

〔大意〕 新居の壁に使う草を刈りにいらしてください。草のように寄り集まる娘らは、あなたが思うまま。

〔解説〕 卷十一の冒頭を飾る旋頭歌(せどうか)です。男女が共に野良仕事をするときに、きつい身体を励ますように心楽しく歌われたのでしょうか。この時代、庶民の家の作りは粗末なもので、掘立柱に屋根や壁は茅や葦などで葺いていました。

家を新築するときの棟上げ式は、「建舞(たてまい)」とも呼ばれ、昔は餅や半紙に包んだ小銭を撒いて祝う風習がありました。近年、すっかり見かけることはなくなり寂しい限り。

(48) 我が命し 衰へぬれば 白栲の 袖のなれにし 君をしぞ思ふ  
〔よみ〕 わがいのちし おとろへ(え)ぬれば しろたへ(え)の 袖のなれにし 君をしぞ思ふ  
(う)

卷十二 二九五二 作者未詳

〔大意〕 私は年老い衰えたからこそ、衣の(ゴワゴワとした)袖がよれよれになるまでむつみあった貴男のことが偲ばれてなりません。

〔解説〕 白栲(しろたえ)はここでは、袖の枕詞(まくらことば)です。白栲とは、カジノキで織った白い布の呼び名です。和紙の原料の楮(コウゾ)は、カジノキと初夏に赤い実をつけるヒメコウゾの自然交雑種といわれています。どちらも町内で見られます。植物図鑑を片手に和紙の里を歩いて探してみましよう。

(49) 磯城島の 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ ま幸くありこそ

〔よみ〕 しきしまの やまとの国は ことだまの たすくる国ぞ まさきくありこそ

卷十三 三二五四 柿本人麻呂(かきのもとのひとまる)歌集

〔大意〕 日本の国は言葉の霊が人を助けてくれる国です。「どうか無事でありますように」と声を出して。

〔解説〕 「磯城島の」は枕詞です。古代人は言葉の霊力を固く信じました。旅に出るとき、険しい峠を越すとき、荒波の上を航海するとき、ことあるごとに八百万(やおよろず=数多くの)の神々に祈りました。恋の成就も、恋人の安全もそうです。

町には、名が付いている山やご神木と呼ばれる巨大な樹木がいくつもあります。それらの高いところには、神が降臨し宿るとして崇拝されてきました。万葉人のように言葉の霊力を信じ、「さちさきにあれ」と、声に出して願いましよう。

(50) 筑波嶺に 雪かも降らる いなをかも 愛しき子ろが 布乾さるかも

〔よみ〕 つくは(ば)ねに 雪かもふるらる いなをかも かなしきころが に(ぬ)のほさるかも

卷十四 三三五― 東歌(あずまうた)

〔大意〕 筑波山に雪が降っているのかな。いや違うかも、可愛いあの娘が織り上げた白布を干しているのかも。

〔解説〕 東歌は、東国(とうごく)の農民などの労働者の間で詠われた、民謡に近い歌とされており作者すら分かりません。巻十四には、東歌二百三十首を集めています。この歌も、郷土の山景色、日常の作業、愛する人への思いを素直に明るく詠みあげ、綾なす織物のように仕立てられており、とても一庶民の作とは思えません。

絹の織物は奈良時代に高麗人(こまびと)によって技術が伝えられました。かつて、この町は養蚕が盛んであったことから、やがて、「小川絹」(建築02・10)と呼ばれる織物の産地に発展しました。小川絹は、今でも高級和服の裏絹(裏に使う布地)として重用されています。

(51) 多摩川に さらす手作り さらさらに なにぞこの子の ここだ愛しき

〔よみ〕 多摩川に さらす手作り さらさらに なにぞこの子の ここだかなしき

巻十四 三三七三 東歌(あずまうた)

〔大意〕 多摩川に、さらす手織りの布ではないが、さらさらと、どうしてこの娘はこんなにカワイイのだろう。

〔解説〕 布さらしは冬季に行われることが多く、凍てつく川水に浸かっての作業は苦痛以外なものもありませんが、心だけは朗らかにリズム感を持たせて詠んでいます。同音を利用して物から心情表現へと転換する技法は見事です。

この衣の布も、多摩川沿いのどこかの田舎で紡がれ、朝廷へと貢がれたのでしょうか。奈良の正倉院には、奈良時代に調(ちょう=朝廷への年貢)として、ここ小川で織られたとされる布地が残されています。その布には、「(略)笠原里(略)調布一端」と墨書きされています。

(52) 君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ

〔よみ〕 君が行く うみへ(ベ)の宿に 霧立たば あが立ち嘆く 息と知りませ

巻十五 三五八〇 作者未詳

〔大意〕 あなたの旅している海辺の宿に霧が立ちこめたならば、それは私が立ち尽くして嘆く溜息のせいだと思いませんか。

〔解説〕 新羅(しらぎ)に派遣された夫へのつるの思いを妻が詠んだものです。当時の船は小さく、航海技術や天候の予想も幼稚なものであり、朝鮮半島に渡る船旅は大変な危険を伴いました。この歌は贈答歌に分類されます。

今は気ままに電車の旅ができます。たまには八高線に乗り、ゆったりとした心もちで窓外を流れる景色を楽しみながら、和紙の里から高麗の郷を訪ねてみませんか。

(53) 君が行く 道の長手を 繰り畳ね 焼き滅ぼさむ 天の火もがも

〔よみ〕 君が行く 道のながてを くりたたね 焼き滅ぼさむ(ん) あめの火もがも

巻十五 三七二四 狭野弟上娘子(さののおとがみのおとめ)

〔大意〕 あなたが配所に行く遠く長い道を、たぐりよせ、畳んで、焼き尽くしたい。そんな天の火はないのでしょうか。

〔解説〕 狭野茅上娘子と中臣宅守(なかとみのやかもり)との間の贈答歌の一首です。身分違

いの二人は恋仲になりましたが、宅守は遠い越前の国に流罪にされてしまいます。そのときの娘子の狂おしいような情念を感じ取れる歌です。

(54) 食薦敷き 青菜煮て来む 梁に 行滕懸けて  
休めこの君

〔よみ〕 すごも敷き 青菜煮てこむ うつはりに むか  
ばきかけて 休めこの君

巻十六 三八二五 長意吉麻呂(ながのおきまろ)

〔大意〕食薦を敷きなさい。青菜を煮て持って来なさい。行滕を梁にかけて、お館(やかた)様はどうぞおかつろぎください。

〔解説〕宴会の最中、意吉麻呂が「食薦」・「青菜」・「梁」・「行滕」のお題を与えられて即興で詠んだ歌とされています。並みの歌人は、お題を一つずつ採り入れて四首の歌を詠みますが、意吉麻呂は難なく一首の中に全てを入れて詠んでいます。各お題が違和感なくつながり、日常の生活が流れるように再現されており見事な限り。さぞかし宴席は盛り上がったことでしょう。

食薦は食器やお膳の下に敷く竹や草の編物です。青菜は蕪(カブ)を指し、春の七草の一つ。行滕は鹿や熊などの丈夫な毛皮で造られたもので、身分の高い武士は騎乗の際に腰に巻き下半身を保護しました。

春、町の田園地帯ではあちらこちらで菜の花を見ることができます。この季節は郊外に出かけて、新緑の山の景色とともに目を楽しませましょう。



(55) 勝間田の 池は我れ知る 蓮なし しか言ふ君が 鬚なきごとし

〔よみ〕 かつまたの 池はわれ知る はちすなし しか言ふ(う)君が ひげなきごとし

巻十六 三八三五 作者未詳

〔大意〕勝間田の池は私も存じて居ます。蓮などはございませんわ。そうおっしゃるあなた様にお鬚がないように。

〔解説〕「勝間田の池の蓮の花は、それは見事で輝くばかりだった。」と、いつまでも興奮冷めやらぬ新田部(にいたべ)親王の様子を見て、その側にいた婦人が髭の生えていない親王をからかい、即興で詠んだ歌とされています。ユーモアあふれていますね。

太古より蓮は、泥の中に根を下ろしながらも、凛と美しく咲くことから不浄の花とされ、仏は蓮華座(れんげざ)の上に乗られています。巨大古墳群のある行田市埼玉(さきたま)地域では、1400~3000年前のものと推定される古代蓮が偶然発見され、今は市内の公園の池で鑑賞できます。35年以上前、埼玉在住の植物学博士から、地元の農家は蓮の蕾を「先玉」と呼び、花が咲くことを「玉が咲く」と言っていたという話を伺ったことがあります。



(56) 織女し 舟乗りすらし まそ鏡 清き月夜に  
雲立ち渡る

〔よみ〕 たなばたし ふな乗りすらし まそかがみ 清  
きつくよに 雲立ち渡る

巻十七 三九〇〇 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 織姫は舟に乗ろうとしているらしい。真澄の  
鏡のように清らかな月夜に、雲を立たせて渡ろうと  
している。

〔解説〕 家持は鏡のような月を仰ぎ見ながら心象を  
詠んでいます。古代の日本では男性の通い婚が普通のものでしたが、ここでは中国の伝説よ  
うに織姫が逢瀬(おうせ)のために舟出したとしています。

天の川の兩岸に離れている彦星と織姫は、年に一度七夕の日に会うとされています。奈良  
時代に始まったこの星祭り、詠み人の想いを我らが町の七夕祭りに重ねてみましょう。

(57) 天皇の 御代栄えむと 東なる 陸奥山に 金花咲く

〔よみ〕 すめろきの みよ栄えむ(ん)と あづまなる みちのくやまに く(こ)がね花咲く  
巻十八 四〇九七 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 天皇の御代が栄えよと、東国の陸奥(みちのく)の山に黄金(こがね)の花が咲いた。

〔解説〕 万葉集に詠われた地名の北限の歌です。その頃、奈良の大仏の鑄造を終え、金で覆  
う鍍金(と きん = メッキ)作業に掛かっていました。しかし、その金が無く窮していたところに、  
未開の陸奥の地で金が産出したという知らせが届き、都はわき立ったのです。

仏像の多くは木造のもので、乾燥させた材木を各部位ごとに彫刻し、それを組み立てて造  
られています。身体部は無論のこと衣、装身具、光背や蓮華座にもくまなく漆を塗りその上  
に金箔を貼り付けたり、金泥を塗布して完成となります。開眼供養を迎えた仏像は、黄金色  
に光り輝き眩いばかりのものであると考証されています。

(58) 紅は うつろふものぞ 椽の なれにし  
衣に なほしかめやも

〔よみ〕 くれなる(い)は うつろふ(う)もの  
ぞ つるはみの なれにしきぬに なほ(お)し  
かめやも

巻十八 四一〇九 大伴家持(おおとものやか  
もち)

〔大意〕 美しい紅はすぐ色褪(あ)せるものだ  
ぞ。地味な椽染めの着古しに適うものか。

〔解説〕 家持が越中守時代、浮気性の部下  
をたしなめるために古女房の良さを着物の色  
と古さに仮託した譬(たと)え歌です。「紅」は



ゴツゴツしたクヌギの樹皮と殻斗

いまのベニバナで、赤や黄色に染め上げた服は高貴な身分の者しか着ることはできません。また、古代は染色の定着方法がなかったため、すぐに色褪せしてしまいました。椽はクヌギのことで、主にドングリの殻斗(かくと=帽子のような部分)を煮出した茶色の汁を染料として用い、汚れが目立ちにくい色なので汗して働く者たちの着物に仕立てられました。

小川町にはクヌギの広葉樹林が至る所にあり、草木染に使うことができる植物も身近に溢れています。染色にチャレンジは良いけど、浮気にチャレンジはしないように。

(59) 春の苑 紅にほふ 桃の花 下照る道に 出で立つ娘子

〔よみ〕 春のその くれなゐ(い)にほふ(おう) 桃の花 したでる道に  
いで立つを(お)とめ

巻十九 四一三九 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 春の園は、桃の花が紅色に美しく映えている。花明かりに照らされた道には乙女がたたずんでいる。

〔解説〕 家持が越中国守当時の作品です。詠み人には、美しい花園の小径(こみち)にたたずんでいる乙女は、きっと桃の花の精に見えたのではないのでしょうか。家持は、新妻の大伴坂上大嬢も越中に連れてきました。この歌は、花見に連れ添ってきた妻の姿を詠んだものかも。

上古寺は花桃の切花栽培が盛んな地区です。花時に訪れると、桃源郷に迷い込んだのかなと錯覚します。



(60) もののふの 八十娘子らが 汲み乱ふ 寺井の上の 堅香子の花



薄紫色の花があたり一面に咲く

〔よみ〕 もののふの やそをとめらが 汲みまが  
ふ(う) 寺井のうえの かたかごの花

巻十九 四一四三 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 大勢の少女が、楽しげに入り乱れて汲んでいる。寺井の水のほとりに、片栗(かたくり)の花が美しく咲いている。

〔解説〕 「もののふの」は「八十」を導く枕詞です。八十は「多くの」の意、堅香子は「片栗」のことをいい、この美しく可憐な花を詠んだ歌は意外にもこの一首のみです。詠み人には、少女と可憐な片栗の花が混然一体として見えたのでは。

小川には、下小川と下里(観光03)、そして西光寺(寺社04)境内地の3か所に片栗の群生地があります。花時には八十氏人が訪れています。

(61) 朝床に 聞けば遙けし 射水川 朝漕ぎしつ つ 唱ふ舟人

〔よみ〕 朝とこに 聞けばはるけし いみづかは(ずがわ) 朝こぎしつ つ うたふ(う)舟人  
巻十九 四一五〇 大伴家持(おおとものやかもち)

【大意】朝床に、聞こえてくるのは遙か遠くの射水川から。静けさの残る朝早くから舟を漕ぎつつ、声高らかに船頭が歌っている。

【解説】射水川は富山県高岡市を流れる今の小矢部(おやべ)川で、氾濫が多いことから射水と呼ばれました。まだ明けきらない寝覚めの床の中、彼方から舟歌が聞こえてきたのでしよう。家持の越中秀吟の一つと言われます。

かつて榎川の栃本堰上流の深所(ふかんど)には貸ボート屋があり、多くの人を訪れ舟遊びに興じていたといえます。最近では、カヌーを浮かべる人もいます。→昔のおがわ写真⑤

(62) 春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に うぐひす鳴くも

【よみ】春の野に かすみたなびき うら悲し この夕影に うぐひ(い)す鳴くも  
巻十九 四二九〇 大伴家持(おおとものやかもち)

【大意】春の野に霞がたなびいてもの悲しい。夕闇迫る中、うぐいすが美しい声で鳴いているというのに。

【解説】藤原氏一門が隆盛を極める中、名門大伴氏は凋落(ちょうらく)の一途をたどりました。まるでこの歌は大伴氏の運命を沈みゆく夕陽に重ねているようです。越中から都に戻った家持の憂鬱な気持ちが滲みでています。

小川では、町なかでもウグイスの声を聴くことができます。まさに「千里うぐいす啼(な)いて緑紅に映ず、水村山郭酒旗の風」(杜牧)そのものの、川あり山あり旨酒を造る酒蔵も飲み屋もあり、古寺も多く緑に囲まれた町。ここに来たならば物憂さを覚えずに済むのでは。

(63) 我がやどの いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも

【よみ】わがやどの いささむらたけ 吹く風の おとのかそけき  
このゆふへ(べ)かも  
巻十九 四二九一 大伴家持(おおとものやかもち)

【大意】わが家の小さな竹やぶから、風が吹いているのか、かすかな葉擦れの音が聞こえてくる。この夕暮れどきに。

【解説】東大寺大仏の開眼供養(かいげんくよう)の翌年の歌です。藤原氏の締め付けはいよいよ厳しく、家持の越中時代の大らかな明るさは消え去り、感傷的な歌へと変化していることが伺えます。風は竹にではなく、詠み人の心のすきまに吹いているようです。

竹林は屋敷林としても郊外の家々に見ることができます。多くは食用に適した孟宗竹です。家持の屋敷の竹やぶは小さなことから、観賞用の黒竹か布袋竹、それとも武門の家として矢を作るために植えた矢竹でしょうか。



(64) うらうらに 照れる春日に ひばり上り 心悲しも ひとりし思へば

【よみ】うらうらに 照れるはるひに ひばりあがり 心がなしも ひとりし思へば  
巻十九 四二九二 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 ぼんやりとかすむ中、照っている春の日に、雲雀(ひばり)が高い空でにぎやかに鳴いている。心は悲しくてやりきれない。独り物思いに沈んでいると。

〔解説〕 活力みなぎる春を詠んだ上の句に対し、下の句では詠み人の抱える物憂さが詠み込まれて、見事に対比表現されています。歌が作られてから1200年以上経つというのに、古代からの時空を超え現在に通じる虚無感がそこにあります。

春の暖かな日が差す頃になると、郊外の畑には麦が勢いよく伸び茂り、雲雀はその中で営巣を行います。物憂い春を感じているのは詠み人だけでしょうか？



赤子を抱く羅漢様

(65) 韓衣 裾に取り付き 泣く子らを 置きてぞ来ぬや 母なしにして

〔よみ〕 からころむ(も) すそに取り付き 泣く子らを 置きてぞきぬや おもなしにして

巻二十 四四〇一 他田舎人大島(おさたのとねりおおしま)

〔大意〕 私の衣の裾を握ったまま離さずに、泣きじゃくる子どもたちを置いてここにきてしまった。もう、かかも居ないというのに……。

〔解説〕 詠み人は現在の長野県上田市付近から、はるか彼方の筑紫(北九州地方)の国に防人(さきもり)として派遣される舎人が詠んだ歌です。胸が張り裂けんばかりの悲しみをそのまま歌にしています。

昭和14年に第2次世界大戦が勃発し、小川からも多くの人々が戦争に徴兵されました。その思いは古代も今も変わりはありません。再びこの故郷の地を踏むことのできなかつた多くの人びとの霊を慰めるため、慰霊塔や忠魂碑が町内の各地に建てられています。

(66) 防人に 行くは誰が背と 問ふ人を 見るが羨しさ 物思ひもせず

〔よみ〕 さきもりに 行くはたがせと 問ふ(う)人を 見るがともしさ 物おもひ(い)もせず

巻二十 四四二五 防人(さきもり)の妻

〔大意〕「防人にいくのはどなたのご主人さま？」と平気で尋ねる女を見ていると憎くてならない。夫を送り出した私の悲しみを分かりもしないで。

〔解説〕 古代も領地を巡って、朝廷と地方豪族の争いは起こりました。朝廷の支配地域に住む男は否応なく兵に徴用されました。この歌には妻の嘆きと怒り、深い悲しみが込められています。

海の向こうの北の国では、裸の王様が隣国を支配しようとして、一方的に戦争を仕掛けて一向に終戦の気配はありません。さらに、彼方の砂漠の地でも、目には目を歯には歯をとばかりに、報復戦が繰り広げられています。いつも真っ先に、無垢な乳幼児や子供たち、善良な一般市民らが戦火の犠牲となり、今も果てしない苦しみの生活を送っている。

兵は凶器、不祥の器なり。持っていると使いたくなるのでしょうか？悲嘆の国に早く平和が訪れますように！

(67) あぢさゐの 八重咲くごとく 八つ代にを いませ我が背子 見つつ偲はむ

〔よみ〕 あぢさゐの やへ咲くごとく やつよにを いませわがせこ 見つつしのはむ(ばん)  
巻二十 四四四八 橘諸兄(たち  
ばなのもろえ)

〔大意〕 あじさいの花が次々に咲き続けるように、八代先までもお栄えくださいませ、愛しい人よ。花を見つつあなたを偲びます。

〔解説〕 詠み人の左大臣橘諸兄は、皇族であり最高の官位にありました。しかし、孝謙天皇を味方にした台頭勢力の藤原仲麻呂の僭越は繰り返され増長の一途をたどりました。



この歌は、親しい友人の慶事に招れた際に、その友人を言祝(ことほ)ぐために詠んだものです。酔いに任せてか、妻のように詠っているところが面白いですね。

学名では「ハイドラングア(水の器)」と呼ばれるように、雨が降ると生きいきとする紫陽花の花は個体差も大きく、一般的には青色ですが酸性度の高い土に植えるとピンク色に変化します。栗山地区の林道や沢沿いに自生しています。

(68) 新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事

〔よみ〕 あらたしき 年の初めの はつはるの けふ(きょう)ふる雪の いやしけよごと  
巻二十 四五一六 大伴家持(おおとものやかもち)

〔大意〕 新年の初春の、今日降る雪のように、めでたく良いことが重なりますように。

〔解説〕 藤原氏が朝廷政権の中枢を占め権勢を握ると、家持は都から追放されるがごとく小国の因幡(いなば)の国守(こくしゅ)に任じられました。この歌は、因幡において開かれた正月の宴で詠まれたものです。降り積もる雪は害虫を殺し、豊年万作をもたらします。子孫繁栄の祈りも込めてこの歌を詠んでいます。

家持は、朝廷参内と地方任官、失脚と叙位を交互に繰り返し、浮き沈みの激しい波乱の人生を送り、最後は従三位(じゅさんみ)中納言兼陸奥鎮守府(むつちんじゅふ)将軍に叙されています。武門の家の惣領として功上げ名を残し、遠い陸奥国において、67歳で亡くなりました。

歌集に収められたこの歌以降、26年間の歌の記録は後世には伝えられていません。家持自身が歌を詠む意欲を失いスッパリと止めたのか、藤原氏によって歌会の吟詠を禁じられたのか。はたまたその後も詠み続け木簡などに書き記していたが、それらの歌のすべてを家持の存在を否定する意図で焚書に処してしまったのか、真実は全くわかりません。

しかし、この吉兆を喜び、吉事を願う歌は万葉集の掉尾を飾るにふさわしいものであることは確かです。

## (結 び)

仙覚律師の偉業によって万葉集は連綿と受け継がれ、今もこうして読むことができます。歌の題材も恋愛感情を表したものや植物や自然、風景、労役など極めて豊かで、詠み人も天皇から名も知れない庶民のものまでを収録しており、庶民の歌集とも言えますが、その写本は古代にあっては富貴な人たちのみの所有物でした。

現代では誰でも入手可能でまことに有難いことですが、四千五百余首の本の購入となると皆ためらうことでしょう。そこで、歌集のほんの一部だけでも紹介することによって、万葉歌に親しみ、律師が「万葉集注釈」を完成させたこの地、小川に興味を示していただけるようにとこの小冊子を作りました。

これを読み、更に万葉歌に親しみ、あなたも一首詠み、その歌を小川和紙の短冊に認めてみませんか。



**まち歩きマップ 解説文もお読みください。**

小川町駅

観光案内所

和紙体験学習センター



# 昔のおがわ 感じルート MAP



比企銀行  
P6 (歴史05) 参照

①



埼玉県立小川製紙研究所  
P19 (建築05) 参照

②



小川郵便局  
P9 (歴史12) 参照 ④



槻川でのボート遊び  
P12 (観光02) 参照 ⑤



第八十五銀行小川支店  
P6 (歴史05) 参照 ⑥



小川簡易裁判所全景  
P28 (芭蕉07) 参照 ③



小川町風景 (福助前)  
P21 (建築08) 参照 ⑦

